



西南特集

トラック 集配 運ぶ 活力

高齢者の作物直販所へ

黒潮町の田辺さん夫妻



生産者と話しながら野菜を軽トラックに積み込む田辺後夫さん(中央)と満子さん(左)(写真はいずれも黒潮町内)

幡多郡黒潮町、薄暗い早朝の山道を1台の軽トラックが山積みした荷物を揺らしながら走っていく。乗車しているのは同町奥瀬川の田辺後夫さん(77)と満子さん(66)夫妻。2年前から高齢者の作った農作物などを集め、代わりに町内の直販所まで運んでいる。生産者らは「2人がおるから今も農業を続けられる」と感謝の声を寄せる。中山間地域の高齢者に夫妻の軽トラックが活力をもたらしている。

笑顔励みに週4回

仕組みづくり

県内で深刻化する過疎 産物を生産しても町中心



山道を走る田辺さん夫妻の軽トラック

「喜んでくれる人がおる満子さん、孫の世話をしけん、えいがよ」と気ながら過ごすうち、一人にも留めない。の役に立つ仕事があった。いって、そんな折、地域活性化を考えるワークショップで出発。10力以上あるトラックで知り合った同セ集荷所や生産者宅の軒先を巡り、ミヨウガやナリの励み。2人が元気なうちはずっと続けていかうかね」と満子さん。後夫さん「仕事というより、会いたい人に会いに行く感じやね」と、野菜を黙々と積み込んでいく。

会いに行く

そうした地域の実情に、県内の自治体職員や大学教授らでつくる県自治研究センター(倉敷市藤原町2丁目)が2007年、高齢者も農産物の直接販売に参加できない仕組みづくりに着手。交通手段を持たない生産者の住む集落の集荷を検討していた。一方、同年1月に福祉課は1人分のまま、集配は週4回。朝は早



集荷した農産物を直販所に降ろす満子さん

卵やミヨウガを出荷している松本良女(ながめ)さん(88)は「前はバスに乗って直販所に行きよった。息子には「バス代払うて行ったら、何しゆうか分からん」と言われながら...でも農業が楽しみやし、2人が集配を始めてくれて、こんなうれしいことはない」と、出るのは感謝の言葉ばかり。「みんなの笑顔が何より」と、出るのは感謝の言葉ばかり。同センターの友永公生さん(38)は「県内で第三者による集配形態は珍しいと思う。このシステムが自立するためには売り手、市場、町の3者で人件費などを負担するのが理想だが、高齢者の元気の源にもなるので町全体、県全体に広げたい」とする。田辺さん夫妻の軽トラックは地域の元気の目印だ。高齢化、過疎、耕作放棄地...中山間地域の課題をけ散らすように今日も元気よく走っている。(幡多支社・井上真)

ご意見・お問合せはこちら

● 黒潮町研究員 (畦地・金子(伸)・友永・山崎・福岡・岡崎) 電話 43-2111 (黒潮町役場内)

● ビジネスサポーター 田辺さん